

**研究紹介** *Rhif 16*

**N.I. Petrovskai 著 “Dating *Peredur*: New Light on Old Problems”**  
*Proceedings of the Harvard Celtic Colloquium* 29 (2011),  
[pp. 223-243].

渡邊浩司（中央大学）

中世ウェールズに生まれた散文物語集『マビノギオン』が収録する「3つのロマンス」の1つ『エヴラウクの息子ペレドゥルの物語』*Historia Peredur vab Efracw*（以下『ペレドゥル』と略記）は、12世紀フランスのクレチアン・ド・トロワ Chrétien de Troyes が古フランス語韻文で著した『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』*Perceval ou le Conte du Graal*（以下『ペルスヴァル』と略記）（1182年頃）とほぼ同じ内容を語っている。『ペレドゥル』の完本を伝える写本は2つあり、1つはアベラストウィスのウェールズ国立図書館が所蔵する写本「ペニアルス4」（『レゼルッフの白い本』）（14世紀中葉）、もう1つはオックスフォード・ボドレアン図書館が所蔵する写本「ジーザス・カレッジ111」（『ヘルゲストの赤い本』）（1382～1400年）である。またウェールズ国立図書館が所蔵する、13世紀から14世紀に筆写された写本「ペニアルス7」と「ペニアルス14」には、物語の断片が認められる。

中世ウェールズの『ペレドゥル』はクレチアン・ド・トロワ作『ペルスヴァル』の翻案ではなく、後に円卓の騎士パーシヴァルとして有名になる人物をめぐる口頭伝承を、それぞれが独自に物語化したと考えられている。いずれの作品にも邦訳があり、『ペレドゥル』は中野節子訳『マビノギオン』（JULA 出版局、2000年）に収録され、『ペルスヴァル』は『フランス中世文学集2』（白水社、1991年）所収の天沢退二郎訳で読むことができる。『ペルスヴァル』の作者については、拙稿「クレチアン・ド・トロワ」（原野昇編『フランス中世文学を学ぶ人のために』、世界思想社、2007年）を参照されたい。

中世ウェールズの『ペレドゥル』と中世フランスの『ペルスヴァル』は筋書きの大枠を共有しているが、細部では大きな違いを示している。中でも最も重要な相違点は、『ペルスヴァル』がヨーロッパ文学史上初めて取り上げた「聖杯」のテーマが、『ペレドゥル』には認められない点である（この問題については日本ケルト学会『ケルティック・フォーラム』第8号、2005年、p.29-41を参照）。いずれの物語にも主人公と女性たちとの出会いが認められるが、『ペレドゥル』で主人公が「クリスティノビルの女帝」の信頼を手にし、女帝の領地をともに統治する挿話は、『ペルスヴァル』には認められないウェールズ独自のものである。ここに紹介するナタリア・ペトロフスカイヤの論考は、この「クリスティノビル

の女帝」の謎を解き明かす試みである。

この女帝への言及が現れるのは『ペレドゥル』後半である。冒険の途上で、洞窟に棲むアダंकという化け物を倒し、「悲しみの小山」で黒蛇を殺めたペレドゥルが、とある溪谷にやって来ると、そこは数多くの大天幕だけでなく、見渡す限り風車や水車があった。ペレドゥルがそこで出会った粉屋に、多くの人々が集まっている理由を尋ねる。すると粉屋はペレドゥルにこう答えた。「2つのうちのどちらかです。あなたは遠方から来られたのか、あるいは愚か者なのです。ここには大クリスティノビルの女帝がおられます。富など不要な女帝は、最高の勇者だけを望んでおられるのです。ここに集まった何千もの人々に食料を運ぶことなどできませんので、こんなにたくさんの風車や水車がここにあるのです」。

粉屋の家で宿を得たペレドゥルは馬上槍試合(トーナメント)に出かけるが、立派な天幕の中にいた美しい乙女に恋い焦がれ、2日にわたり乙女を見つめて一日を過ごしてしまう。3日目に粉屋に促されてようやく馬上槍試合に参加したペレドゥルは、相手を全員投げ飛ばしてしまう。そこで女帝がこの「粉屋の騎士」に使者を送り、女帝とペレドゥルが面会する。実はアダंक退治に先立ってペレドゥルは美しい女性に出会っていたが、その女性こそ女帝その人だったことがここで明かされる。女帝は初対面のときペレドゥルに、洞窟に棲むアダंकが誰の目にも見えず、円柱に隠れて毒槍を投げて皆を殺してきたことを教えた上で、ペレドゥルが彼女をすべての女性の中で一番愛すると誓うなら、洞窟に入るときにアダंकの姿を見ることが出来る石を差し上げようと述べた。ペレドゥルがこの申し出に同意すると、女帝はペレドゥルに石を渡して姿を消したのだった。ペレドゥルと再会した女帝は、この時の約束をペレドゥルに思い起こさせ、以後2人でその地を14年間治めたと物語は伝えている。以下ではペトロフスカイヤの論考の要点を順次辿っていくことにしよう。

1) 「クリスティノビルの女帝」挿話についてはすでに、G.W. ゴイティンクらの神話学的解釈がある。ケルトの神話伝承では、王が支配すべき国土は、擬人化されて「支配権」を具現する女神となり、両者の結婚が国土の安寧には不可欠とされた。したがって『ペレドゥル』の「女帝」はこうした女神の化身と考えられる。これに対してペトロフスカイヤは、「女帝」挿話がウェールズの『ペレドゥル』にしか見られないことを、神話学的解釈では十分に説明できないと主張し、歴史上の人物が「クリスティノビルの女帝」のモデルになった可能性を探るのである。「クリスティノビル」は通例コンスタンティノーブルを指すと考えられている。中世盛期のフランス文学には、クレチアン・ド・トロワの『クリジェス』

(1176年頃)、逸名作者の『フローールとブランシュフロール』(1160年以降)など東方を舞台とした作品が多く認められるだけに、クレチアンの『ペルスヴァール』にも東方の「女帝」挿話が認められても不思議ではないはずである(中世盛期のフランス文学とビザンツの関係については、根津由喜夫『夢のなかのビザンティウム』、昭和堂、2009年を参照されたい)。

2) 『ペレドゥル』の「クリスティノビルの女帝」挿話について、最初に注目すべきは「女帝」*amherodres* という肩書である。この肩書は「貴婦人」*arglwydes* や「女王」*brenhines* とは異なる。ウェールズの他の物語では、この種の称号はアーサー(アルスル)に限られる。もちろん例外もあり、中世ウェールズ文学作品では、『マクセン・ウレディクの夢』(邦訳は中野節子訳『マビノギオン』を参照)の中で、ローマ(ルヴァイン)皇帝マクセンが夢に見たエレンが三度「女帝」と呼ばれている。これに対してアーサー王妃が「女帝」と呼ばれるテキストは見つからない。したがって作中で「女帝」と呼ばれる女性は、象徴的な用法であるとしても、国や支配権との密接な関連を予想させる。

3) 次の検討課題は、女帝が治める「クリスティノビル」がどこを指すのかという問題である。「ペニアルス4」(『レゼルッフの白い本』)と「ジーザス・カレッジ111」(『ヘルゲストの赤い本』)には *amherodres Cristinobyl vawr* という読みが認められ、通例 *Cristinobyl* はコンスタンティノーブルを指すと考えられている(語末の *byl* は *polis* に由来する)。音声上 *Crist* が *Constant* と混同されるとは思われないため、*Cristinobyl* は *Christonopole* と理解されてもよかつたはずである。それでも異教徒の国々に囲まれたコンスタンティノーブルが「キリスト教の町」を指すと考えられた可能性も高い。「ペニアルス7」写本が伝える断片に *Corsdinobyl* の綴りが認められることから、写字生が意図的か否かは別として、一連のミスを重ねて *Constantinobyl* が *Cristinobyl* になったと推測することができるだろう(まず *Constantinobyl* の中ほどの *ant* が抜けて *Constinobyl* になり、次に *n* が *r* にかわって *Corstinobyl* になり、最後に語頭 *Cor* の *o* が脱落すると *Cristinobyl* になる)。しかしこれはあくまでも推測にすぎず、実際には女帝とコンスタンティノーブルとの関連は断定できない。

4) 参考までに中世ウェールズの4写本(「ジーザス・カレッジ111」「ペニアルス4」「ペニアルス5」「ペニアルス7」)の中で、コンスタンティノーブル関連の名前がどんな綴りで何度現れるかを調査したところ、綴りとしては *Constantinobyl*、*Corstinobyl*、*Corstinabyl*、*Cristinobyl* が認められた。「ペニ

アルス 7」写本が伝える『ペレドゥル』の断片に認められる *Corsdinobyl* は、逸名作者による『シャルルマーニュの巡礼』（オリジナルはフランス語、1150 年以降）やオータンのホノリウス作『世界の姿』（オリジナルはラテン語、12 世紀初頭）のウェールズ語による翻案には *Corstinabyl* や *Corstinobyl* の形で現れ、明らかにコンスタンティノープルを指している。しかしながら、こうした翻案作品の例を根拠にして『ペレドゥル』の女帝の治める国がコンスタンティノープルと断定するのは早計である。

5) 「女帝」につけられた「クリスティノビル・ヴァウル」*Cristinobyl vawr* という表現は、文字通りには「キリストの（何か）大きな＝偉大なもの」を指す。しかし *Cristonobyl* が地名を指し、これに「大きな」*vawr* がついている以上、対になる「小さな」*fychan* 部分も想定できる。『キルッフとオルウェン』（邦訳は中野節子訳『マビノギオン』を参照）で門番のグレウルイトがアーサー（アルスル）に話しかけた時、ともに訪ねた国の名を挙げる中に「インディア・ヴァウルとインディア・ヴェトン」、つまり「大きなインドと小さなインド」が認められるのがその傍証となる。「大」「小」の形容は同じ場所ではなく、異なる場所を指している可能性もある。したがって『ペレドゥル』の「クリスティノビル」にはコンスタンティノープルだけでなく、ローマやエルサレムなども候補として考えられるかもしれない。

6) クリスティノビルがコンスタンティノープルを指すと仮定した場合、『ペレドゥル』の最古の版（断片）を収録する「ペニアルス 7」写本の筆写時期（13 世紀～14 世紀）以前に「女帝」の該当者は見つからない。なるほど東ローマ帝国マケドニア王朝の女帝テオドラは 1055 年から 1056 年に帝位にあったが、残念ながらウェールズとの接点はない。ところが同時期の神聖ローマ帝国に目を向けると、理想的な候補者が見つかる。それはイングランド王ヘンリー 1 世の娘マティルダである。1102 年生まれのマティルダは、12 歳で神聖ローマ皇帝ハインリヒ 5 世と結婚すると、夫の亡き後も「皇后」の肩書に固執した。マティルダの再婚相手であるフランスのアンジュー伯ジョフロワ 4 世の父フルクは、1131 年から 1143 年までエルサレム王であったため、マティルダはエルサレム王の義理の娘にもなった。

マティルダはイングランド史上「無政府時代」と呼ばれる時期を生き、父ヘンリー 1 世が亡くなると、従兄のブロワ伯家のエティエンヌ（スティーヴン）とイングランドの王位継承をめぐる争う。マティルダは義兄グロスター伯ロバートの支持を受け、1141 年にはリンカンの戦いでスティーヴンを破り、ロンドン

入りする。マティルダは南ウェールズに支持基盤があったため、ウェールズではよく知られていたと考えられ、『ペレドゥル』の女帝の有力な候補となる。

7) 物語の中でペレドゥルが女帝のために戦う件は、グロスター伯ロバートが義妹マティルダのために戦い、リンカンの戦いを制する史実と重なりあってくる。またマティルダは謎めいた存在と考えられていたため、『ペレドゥル』の女帝のイメージと合致し、ケルトの大女神を持ち出す神話学的解釈に頼る必要はなくなってくる。仮にマティルダ=女帝説を取れば、『ペレドゥル』の創作年代の想定も可能になる。史実によると、スティーヴンの王権が弱体化し、マティルダが大陸からイングランドに戻るのが1139年であるため、これが創作年代の上限となる。一方でロンドンに入ったマティルダは結局のところ市民の支持を得られず、スティーヴン軍の反撃にあい、1148年に大陸へ逃走したため、この約10年間は鍵になる。『ペレドゥル』の「女帝」挿話は、「無政府時代」の始まりから、マティルダの息子ヘンリー2世の治世の終わりまでの時期に作られ、更新された可能性があるだろう。東方を想起させるマティルダ像は、プランタジネット朝とエルサレムの結びつきが強化されたヘンリー2世の治世にこそ意味があったと考えられる。

8) クレチアン・ド・トロワ作『ペルスヴァル』では、主人公ペルスヴァルが「雪上の血の滴」を目にすることで麗しのブランシュフロールを思い出して瞑想にふける挿話の後、ペルスヴァルはアーサー王一行との再会を果たし、宮廷でのお祭りの折に「醜い乙女」が現れてペルスヴァルを詰る挿話へと続いていく（『ペルスヴァル』の物語構造については拙著『クレチアン・ド・トロワ研究序説』、中央大学出版部、2002年、p.76-108を参照）。『ペレドゥル』でも「醜い乙女」の挿話は「雪上の血の滴」挿話の後に来る。しかしながら『ペレドゥル』でこの2つの挿話の間に認められる「女帝」挿話は、クレチアンの『ペルスヴァル』には認められない。この問題については、様々な可能性が想定できる。その1つは、そもそも「女帝」挿話が、クレチアン作『ペルスヴァル』の着想源には含まれていなかったという可能性である。一方で仮にクレチアンの着想源に「女帝」挿話が含まれていたなら、クレチアンは意図的にこれを採用しなかったことになるだろう。また創作時期から見た場合、クレチアンの『ペルスヴァル』は『ペレドゥル』に先行すると考えられることから、『ペレドゥル』の作者が大陸から島へ渡った『ペルスヴァル』に接する機会があったという仮説が正しければ、『ペレドゥル』の作者が「女帝」挿話を追加したことになる。しかしすべては推測の域を出ない。

以上のようにペトロフスカイヤの論考の目的は、『ペレドゥル』に登場する謎めいた作中人物の一人である「女帝」のモデルを探し当てるところにある。論を進める中で浮上してきたのは、皇后の肩書を持ち、東方との接点もある、ヘンリー1世の娘マティルダである。神聖ローマ皇帝だった最初の夫ハインリヒ5世の父フルクがエルサレム王であったという事実は間接的なものに留まるとしても、マティルダの息子ヘンリー2世とエルサレムの王たちと密接な関連は否定できない。「無政府時代」を生きたマティルダがウェールズに支持拠点を持っていたことも傍証となる。このようにペトロフスカイヤは、史実との突合せにより、『ペレドゥル』成立の背景の解明に努めたのである。

『ペレドゥル』の「女帝」挿話の解釈は一筋縄では行かないが、物語の完本を伝える『レゼルッフの白い本』と『ヘルゲストの赤い本』以前に筆写された「ペニアルス7」写本が、最初の段落を欠き、ペレドゥルが「女帝」と共同統治をするところで突然終わっていることは、写本伝承上の事実として重要ではないだろうか。このことは「女帝」挿話が、物語の完本成立以前から独立した口頭伝承として存在したことの証であるだけでなく、中世フランス文学の1ジャンルである「短詩」のように、『ペレドゥル』という長編物語の生成における基本単位の1つだったと推測させてくれるからである（「短詩」については拙稿「<ブルターニュの短詩>に見られる<口承性>をめぐる考察」、『ケルト一口承文化の水脈』、中央大学出版部、2006年、p.153-176を参照されたい）。